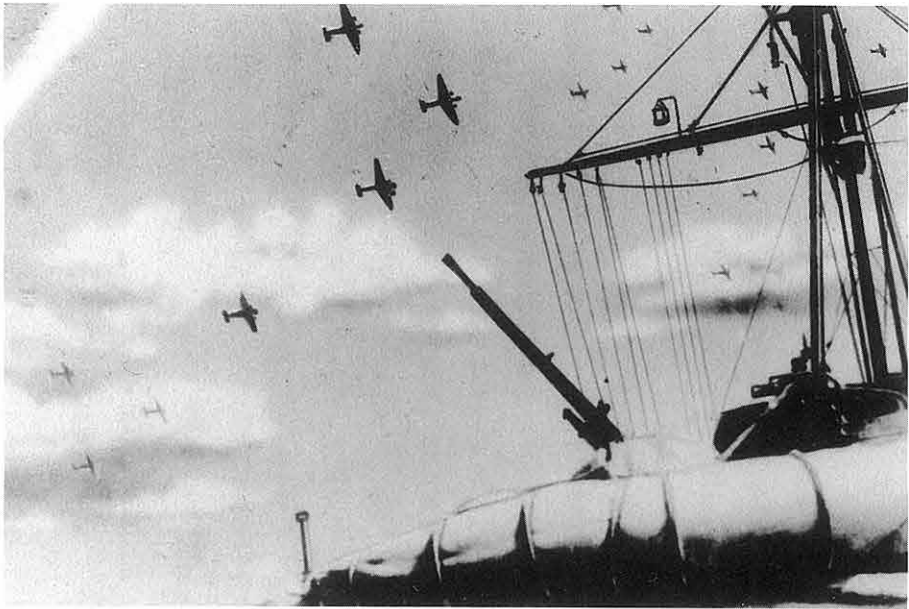


第二部

從軍・抑留

従 軍



「大日本国防婦人会杉並第三分会」アルバムより

〈提供 井口金男さん〉

応召の体験

●阿佐谷南三丁目

青地 重治

(大正三年生まれ)

昭和二〇年一〇月二〇日夕刻、阿佐ヶ谷駅に着く。懐かしの我が町、今や戦争から、弾丸から、死から解放されたことは間違いない。自由への第一歩である。肩章も外したぼろぼろの軍服に身をつつみ、あわれな敗戦帝国軍人の姿だ。でも気持ちは元氣潑刺、負けた気持ちがない。はやる気をおさえ、我が家に急ぐ。焼けてないはずだ、と心にしかと確認して、阿佐ヶ谷六丁目に向かう。おお、おお、我が家は無事、

ポロポロながらも存在なり。玄関の戸を開けた。その瞬間、うぶ声一声、我が第二世、長男誕生の日であった。感激更にあらたになる。その長男も早や四七歳、二児の父として、私の商売を継いでいる。復員、すなわち終戦以来、国民の努力に依り今日、日本は経済大国となった。平和な日本に暮らせる事は大変に幸福な事である。

しかし多くの戦死された人々の事も忘れてはならない。想えば、昔元寇の役では敵が本土を襲来するも、神風来りて国難をさけて通ったものだ。そして日清・日露戦争を経て太平洋戦争へと突入していった。

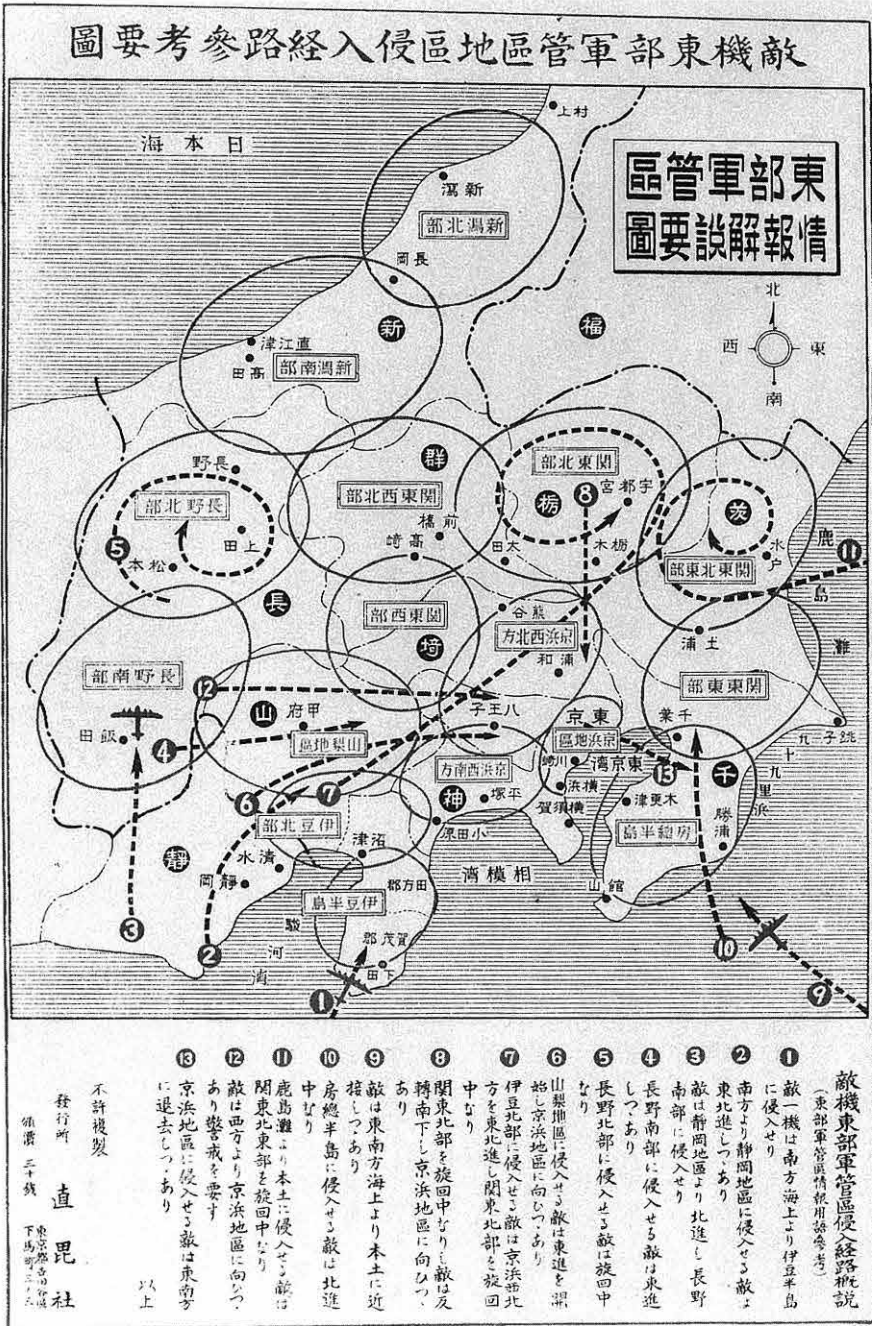
私たち昭和九年兵（当時二一歳）の若武者は戦争にかり出され、終戦迄は全くの灰色の人生でもあった。召集に、また召集と実に四回の応召であり、各地に転戦、転戦をくりかえして、終戦は九州でむかえた。

その間生死の戦いであり、一度は右腕に貫通銃創と足に銃創を受け、九死に一生を得た。足かけ一〇年の戦いで、無事に帰還できた事は、全く幸福と言わざるをえない。戦争とは殊に一兵卒などは、上官の命令に従って黙々と進み、戦う。毎日、毎日が生死との戦いである。二貫近い重い背囊を背負い、その上ずしりとした銃と弾丸を持ち、行進に行進が続く。野営ともなると汗と泥塗になった身体でごろ寝で、雨露をしのぐ。兵隊とは集団だから、団体で行動するから勤まるので、一人ではとても勤まらない。当時を想えば、戦争などいやなものだ。

今や平和憲法のもと、自ら戦うことはない。自主防衛、結構なことである。

平和な日本よ、永く平和の続くことを望む。

圖要考參路經入侵區地區管軍部東機敵



敵機東部軍管區地區侵入経路参考要図 <提供 井口金男さん>

みじかくて長かった軍隊生活

・和田三丁目

浅井 久雄

(大正二年生まれ)

思い起こすのも嫌な気をする終戦間近の戦地に行かない内地の軍隊生活。昭和一九年六月一日、妻と一歳半の長男を置いて横須賀海兵団へ行った。一〇日間色々な仕度をして茨城県の百里原航空隊へ一〇〇名で行った。色々な部に分かれ、炊事兵、輸送兵、衛生兵とか、自分は飛行機の整備兵に廻された。夏の暑い二か月、新兵教育は毎日が我慢々々の連続で、いくら喉が渴いても水も飲めない。午前中学課だと午後訓練という仕組で、午前の訓練で午後の学課は疲れで眠くなって、居眠りなどしたらびんたをいくつも張られてしまうから太股をつねったりして眠いのを我慢した。勉強など頭に入らなかった。新兵教育に入って二週間位した朝、誰かが顔を洗って水道を止めないで来たから、水道を止めなかったのは誰だ、と申し出るまで急降下という罰をやらされた。それはどんな罰かというと、テーブルの上に足を掛け床に手についているのだが、その日は一寸暑い日で流れ出した汗が床についている手をすべらせて、何ともつらい長い時間だった。三時間位の間班長はいろいろな訓示をした。海軍は船の中の生活で、

一人の失敗は全員を失うことになるなどと聞かされたが、苦しいのを我慢して何のためにこんな馬鹿な事をさせるのだろうと思っていた。昼近くになってやっと終わって朝食に盛った食事は食わずに食缶へもどして残飯にしてしまった。

八月の終わりが、新兵教育も終わって一一分隊へ配属になり、一一班に入った。分隊長から班長など名前や階級など覚えるのが大変だった。昼間の作業は飛行機の整備の道具運びや使い走りですぐに楽しくなくて楽だった。三週間位たった夜、長野県から来た一一班の者が殴られて死んだが、全く気の毒だった。どうして死んだかという、それは次のとおりであった。何か無くなった、分からない事など困った時は必ず班長に申し出るようにいわれていたから、彼は洗濯して干場に干して置いたシャツがなくなっていたので班長に言った、「お前のシャツなど干場に何枚もぶら下っている」と言われ配給してくれない。外の者に聞いたら干場から要領良く取って来るしかないと言われ、持って来るところを外の分隊の者に見付かって一一分隊の者がシャツを盗んだと分隊へ知らせが入っ

た。自分が申し出ても配給などしてくれないのであるが、班長は「なぜそんな事をした」といって、皆の前で廊下へ立たせ「足開け、歯をくいしばれ」と言って拳で力いっぱい頬を殴った。気を失って倒れた時、後頭部を上りかまちへぶっつけて意識が戻らぬまま夜中の一二時ごろ息を引取った。一日たつて憲兵が取調べに来て、殴った班長は横須賀の軍隊の刑務所へ行ったそうだ。死んだ彼の実家へはうその手紙で知らせられ、つり床を降ろしに柵へ上って落ちて死んだと書かれたそうだ。奥さんからの手紙が廊下へ張り出してあったが、「自分の不注意でそんな死に方をして誠に申し訳ない。村の多勢の人に送られて行ったのに何の手柄も立てられず、村の方たちに何と言つて良いか解りません」と、切ない気持ちで書いてあった。

分隊へ配属になったころ三〇機位あった九七式艦上攻撃機というハワイを急襲したのと同形機が段々少なくなって、毎日すごい訓練をしていた兵士も少なくなって、整備作業も暇になった。どこの戦地へ行くのか、若い士官がねられなくて飲んで夜遅くまで兵舎の中をさまよい歩いていた。やるせない気持ち察せられた。

一月中旬ごろ、何分隊も入っていた二階建ての大きい兵舎が空襲で丸焼けになって、バラック生活になった。それまで毎晩のように拳で顎を殴ったり、『軍人精神注入棒』と書いたバットのような棒で尻など殴るなど色々な罰があったが、バラックになつてから少なくなつて安堵した。昭和二〇年の正

月がすぎて作業がないので松根油を取る話があり、建築に関係ある仕事をしてきた者は申し出るというので、率先して出た。仕事は釜を築いて松の古い根から油を取るといふ。二時間位説明を聞いて五人ずつ五班に分かれて福島の方へ行った。最初福島市の近くの村で、大きな寺へ泊つて近くの作業場へ通う。村の人が一五人も手伝つてくれて八日目に大体出来て、次は山の中の仁田木村という所へ行く。やはり一五人も村人が手伝つてくれ一週間で出来て、次は岩沼市の近くで三か所築いて隊へ帰つたが、どこの村の人たちも温かいもてなしだった。隊へ帰つてからも隊の近くで松根油取りをする。

八月一五日のあの放送は農家の庭先で聞いたが、良く聞き取れなかつたが、「ポツダム宣言を受諾セリ」とはよく聞こえた。これでもう家へ帰れると内心思った。一週間後、片付けして二日に隊を後にして上野で電車がなくなつて一夜をすごし、二三日朝、善福寺の近くの家へ帰つた。一年と二か月兵隊として務めたが、国のためになるようなことはしなかつた。生産にたずさわることもなく、全く無駄な月日を送つた気がする。毎日おどおどしながらでも、生命があつて良かった。

戦争終戦体験記

●高円寺南三丁目

新井 信三郎

(大正八年生まれ)

昭和十五年一月二日、須田町、総武線と中央線との分岐

点に、現在の鉄道博物館の横あたり、S兵曹長とH中佐の銅像があった。その広場の向かいの旅館旭楼に、春部隊の第三大隊、第一中隊の現役兵として入隊、翌一三日麴町小学校校庭にて軍服を受け取り一四日、再度麴町小学校において三八式歩兵銃を渡され、一五日未明、凍りつく芝浦港より貨物船に身を託し、瀬戸内海を通り抜け関門海峡から外海へ、機雷を避けながら玄海灘を二途北支へ。船酔いのため甲板をはいずり回り断食状態に梅干をしゃぶり、一〇日目にやっと太沽港に上陸、京漢線を北上して正定城に着く。甲種合格現役兵、現地教育の第一期兵として初年兵教育始まる。

現地戦場での教育訓練はつねに戦火のもと、三か月も夢の間に一期の教育も終わり、その後大隊、旅団の集合教育を経て、保定の下士官候補者隊に入隊、六か月の下士官教育終了後、更に石門憲兵隊に入所、治安工作の宣撫教育を受け三年目に原隊に復帰、以来兵舎無き野戦部隊、冀東の山岳地帯を夜昼の区別なく、晴雨に関係なく部落から部落へ、ある時は

高梁^{コリヤン}繁る路上に宿営の二年有余。

内地を発つとき母よりの何よりの贈り物、千人針の腹巻きも今は既にシラミの安住の館、常に数百匹のシラミも我が良き友となり、時には手の平に乗せて共に東の空に思いをはせる。

終戦の年、昭和二〇年二月九日、河北省、趙各莊の戦いに二〇〇〇の敵と交戦、重機関銃の集中弾を受けその場で左手を吹き飛ばされる。当戦場において戦死者九名、負傷者一三名なるも、敵兵五〇〇を殲滅^{せんめつ}、捕獲兵器数一〇〇の大勝利、我れ左片手失うも生命至って元氣旺盛にして、天津の陸軍野戦病院に収容される。

その年四月一日、赤十字の旗甲板に病院船にて七年振りに内地下関に上陸、広島^{ヒロシマ}の陸軍病院を経て相模原の東京第三陸軍病院に入る。隣が八八高射砲隊のためか四六時中敵機の乱舞激しく、七月三十一日、一五〇名の傷痍者を引率(当時、小生責任者にて他に伍長一名、兵長一名で三個班を編成、新潟県瀬波温泉に疎開する。東京第三陸軍病院の傷痍者は全員上

肢か下肢の切斷患者で、内臓は元気一ぱい健康そのもの。當時瀬波温泉は国道をはさんで全部で三軒、裏は山で前は日本海、ここに五〇名ずつ三班に分かれてお世話になる。

疎開して二週間、八月十五日正午、NHKラジオ放送で終戦のニュースが流れる、と同時に寝具は片付けられ、その日の夕食から食事も出ない。交渉しても無き袖はふれぬとて駄目、宿としても軍の保証の打切りを心配しての処置とあきらめる。

しかし我々も食はずにはおれず、早速裏山の赤土を、前の海辺に運び塩田をつくり、海水を汲みあげ夕刻になると白く光る砂浜に岩塩を集め、半農半漁の部落にサツマ芋との物々交換に歩く。そして一か月、九月一日東京第三陸軍病院より電報来たり。帰りたくて自分で帰れる者は自由に行動せよとの連絡にその日、疎開班の編成を解散する。

その晩、蜂の巣をつついたように村上駅に押しよせる。當時村上駅を通過する列車は一日に一本、秋田発上野行きで、村上駅を通過するのは夜の八時ごろと記憶する。

その列車も村上駅を通過する時は既に鈴なりの超満員、一度に一五〇名はとても無理とまた、三班に分かれてジャンケンで順番をきめ、私は二日目の二五日、一丁ふんどしに白衣、宿でもらった下駄履きに手ぬぐい一本、お宝は五円位有ったから、取りあえず瀬波を後に上野駅へと向かう。

当時実家は既に三月の空襲で家族全員生死不明、行先不明、そのまま国鉄上野駅と京成上野駅との連絡地下道に起居する。

先住の先輩のまねをして早速進駐軍のタバコの吸ガラひろい、それを巻き直して手巻きタバコの販売。爪の先に火をともしような生活も半年、僅かな蓄えで昭和二二年春、高円寺に四畳半の建売りバラックを購入、昭和三九年東京オリンピックの年に改築し現在に至る。

当時主食食料の配給は高粱、トウモロコシの粉にサツマ芋の粉、高粱は戦地でも常に食べていたので最高の御馳走、トウモロコシの粉はフライパンで焼いてままああの食料、しかしサツマ芋の粉はどうしても食べられない。だんごにしてお汁に入れても苦くて仕方ない。そのころ誰が発明したのかポレンセンベイなるものが流行した。二枚の鉄板の枠の中に粉を入れて七輪で熱したころ、二枚の鉄板を開くとポンと音をたててセンベイが出来る。これは苦みも取れて美味しく食べられた。

ポレンセンベイの道具が上野にあると聞き、早速購入。四畳半のバラックでポレンセンベイの委託加工、毎日東の空が明るくなるまで焼き続けても注文殺到、目方で何枚という事なので、余録で我が胃袋は常に満腹。

このような昔話は現代の若者には通じない。ササニシキとかコシヒカリのような一等米でも炊飯器がなければご飯も炊けぬ。二四時間金さえ有ればいつでも何でも手に入る現在、このような時代に甘えて育った現代人、『災難は忘れたところにやってくる』明日にも解らぬ天災の非常時を思う時、年寄りの心は痛む。

敵前逃亡ではない

●上萩三丁目
宇田川 道芳

(大正一一年生まれ)

私は昭和一七年一二月、召集令の赤紙一枚で、岐阜の各務原教育飛行隊に入隊、伊吹^{おろし}風の厳冬の中、自動車手の教育を受けた。時に私は二〇歳。

昭和一八年四月内地を出発、貨物列車や輸送船を乗り継いで、南支広東の飛行場大隊に転属、桂林作戦に参加、毎日爆撃機や戦闘機を飛ばしていたが、同一九年一月、私の部隊は東部ビルマ（現ミャンマー）に前進、昆明作戦に参加した。

同二〇年一月、更に前進してビルマとインドの国境アラカン山脈の、インパールを攻略するための作戦に参加した。私が敵前逃亡を図ったとの疑いで、上官から体罰を受けたのはこのインパール作戦で、日本軍が敗れそうになったときのことである。

インパールから一〇〇キロ手前のコーリン飛行場に私たちは派遣され、爆撃機や戦闘機に燃料や弾薬を、ニッサン三九年型トラックで運ぶのが私の任務であった。その飛行機はインパールで戦う歩兵部隊に協力、英軍の基地や陣地を連日たいていた。

ところが間もなく、私たちの飛行場には日本軍の飛行機は一つも来なくなり、逆に英軍機が連日低空で私たちを爆撃に来るようになり、防空壕に身を伏せる毎日であった。「天皇陛下万歳」と言って死んでいく兵隊と違い、現地ビルマ人の使役は恐怖のあまり悲鳴を上げ、オシッコをもらすしまつ。戦争は無惨だ。交戦国でもない外国人を死地に追いやる、と私は齒^{はきり}軋した。そのうちに英軍の空艇部隊が私たちの後方に降下、陣地を築いたとの噂が流れた。

やがて私たちのトラックは、退却してくる日本兵士を收容するため前線に向かった。收容に行つて私たちがまず驚いたのは、退いてくる兵士は誰も小銃をもつておらず、腰に野菜類を無雑作に結びつけ、雑^{ざう}囊に米や調味料などを入れ、飯盒をくりつけ、何が入っているのか背負袋を背中に、杖にすがつてトボドボと歩いてくる兵士の列が三三五五と続いていたことだった。無理もない。山の中の道を何十キロも退却してきた兵士、アミーバー赤痢、マラリヤ、 Dengue 熱などの熱帯病にかかり、重い三八式歩兵銃を担ぐ元氣などとてもな

かつたろう。憔悴しやうすいしきつた顔面蒼白な顔を今でも思い出す。私たちの部隊から派遣された兵士をまずトラックに満載。乗せてくれ、乗せてくれと弱々しい声で口々に叫ぶ兵士の群を、むごいようだが見捨てるようにして後方の部隊に向かった。私たちが見捨てた兵士はその後どうなったことだろう。

退いてくる兵士の收容任務を終えたある日のこと、私はシェイボ市に駐屯中の本隊から緊急の呼出し命令を受け、出頭してみると、上官から一通の手紙を見せられた。その手紙は同年兵のY伍長（乙種幹部候補生）から私に宛てたもので、上官の検閲にひつかかったものだ。その手紙の内容は鮮明に覚えてないが、次の要旨のものであった。

「この戦争は近いうちに必ず日本が負ける。宇田川一等兵よ、私と共に最前線の英軍陣地に行こう。私は多少英語が喋れる（彼は早稲田大学出身）。わけを話せば英軍は私たちを殺さないばかりか、捕虜として大切に扱ってくれる。英軍陣地に辿り着くまでは、宇田川一等兵のように機敏で、良く気の利く戦友が私には必要なのだ」という内容でした。

呼び出されたもう一つの理由は、派遣隊の上官が私の私物を調べたら、次のインパール敗戦歌という私の作詩メモがでてきたからだ。

一、敵の陣地を占領し

敵の食糧弾薬で

敵を殆たおせと我が軍は

二週間分の弾丸たまと食

二、飛ばす飛行機いまは無く

連日連夜の爆撃に

現地の人らはおびえきり

敵の襲撃我は待つ

三、小銃弾薬みな捨てて

食糧腰にくくりつけ

杖にすがりて退りくる

兵士の蒼面悲しかり

四、我が疾風の進撃に

コヒマ・パレルは落ちたれど

ああ挾撃きょうげきの功成ならず

五万の英霊地下に哭なく

（以上のインパール敗戦歌は記憶による。）

私は本隊に到着後直に上官の尋問を受けたが、私は直立不動の姿勢で、はっきりと次のように答えた。

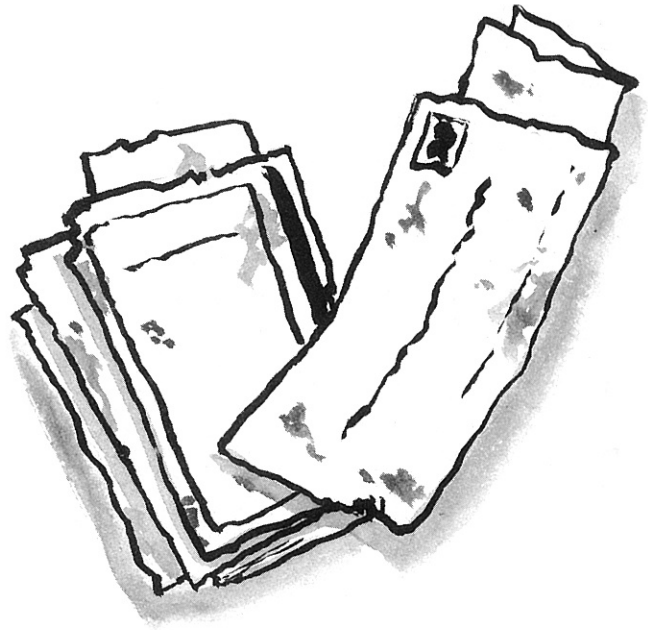
Y伍長が派遣隊にいる時、たしかに英軍陣地に行こうと再三誘われたことがある。だが私は「帝国軍人としてそれはできない」とはっきり断りました。またインパール敗戦歌は、見たままの通り表現したもので、反戦思想とは思っていない。死ぬ時がきたら帝国軍人として私は立派に死にます。

上官は「文句言うな」と言っただけで私の顔に何回もビンタをくらわせ、「一日中正座している」と私に命令、私が正座するのを見届けて部屋を出て行った。正座の足が痺しびれ、感覚がなくなった時、私は思った。「俺が何悪いことした、なんでこんな

目にあう」と、私は胡坐をかいた。廊下に足音がしたら正座、上官が部屋を出たら胡坐、を何回も繰返し、昼食抜きで一日が終ろうとした時、私は許された。

その時の上官の口軍曹が言った。「宇田川、我々帝国軍人は命令に従っていけばよいのだ。私も時局は感じている。だが目で見たものには目をふさぎ、口に出してはならない、ましてや文字で表現するのは厳禁だ」と。思えば私にピンタをくらわした手に力が入っていなかったような気がする。この件については戦場の最前線であったため、二人とも不問に付された。

この事件後間もない昭和二〇年四月、私たちの部隊も転進を開始、ビルマを南下し泰緬鉄道で国境を越え、タイのバンコクで一息入れ、更にマレー半島に転進、半島中部のバハウ町で終戦を迎えた。武装解除で我々は一行に行進武装した英軍に取り囲まれながら、銃や剣を集積場に放棄、啞然としながらも私たちは安堵の顔を見合せた。時は昭和二〇年八月下旬、私二三歳。





アルバム「満州駐劄記念」より 〈提供 菊池正芳さん〉